

大東文化歴史資料館だより

第22号 2017. 5. 31

館長就任のご挨拶

百年史編纂委員会委員長・経済学部現代経済学科教授 中村 宗悦

このたび大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）館長を拝命しました経済学部の中村宗悦です。百年史編纂委員会委員長も引き続き兼務いたします。何とぞお引き回しの程よろしくお願い申し上げます。

さて、本学園は1923（大正12）年9月1日に発生した関東大震災の余燼覚めやらぬなか、東京・九段の地において産声を上げ、以来キャンパスを池袋、青砥、池袋、板橋、東松山と拡大発展させながら、93年余の歴史を刻んで参りました。2018（平成30）年にはスポーツ・健康科学部に看護学科、文学部に歴史文化学科、新学部として社会学部を設置し、9学部21学科となる予定です。そして、いよいよ2023（平成35）年9月20日には創立百周年を迎えます。

大東文化歴史資料館では、2007（平成19）年から、百年史編纂に向けた準備作業として、展示企画及び大東文化学院、大東文化大学卒業生・関係者からの聴取調査等を進めるとともに、2009（平成21）年には、運営委員会レベルにおいて、百年史編纂の意義、編纂体制の提案及び専任スタッフ配置の必要性等をとりまとめました。そして、2010（平成22）年7月には、理事会において、「百年史編纂委員会」の設置が承認されました。

また本資料館の運営委員会は、百年史編纂の意義として、①大学の個性の確認、②アカウンタビリティの履践、③大学評価における大学沿革史の項目化、④情報公開法への対応、⑤自校史教育への活用を挙げています。また、本学にとっての固有の意義として、本学が日本近現代史の中で演じた役割を批判的に解明することを通して、建学の精神を再確認することが社会に対する責務であるとしています。

これらの意義を自覚しつつ百年史編纂委員会はこれまでの大学史編纂事業の成果を踏まえて、資料編・本

編を併せた百年史を編むことを決定しました。本学ではこれまでもそれぞれの節目に際して『大東文化大学五十年史』『創立60周年記念 軌跡』『大東文化大学七十年史』『心は放て天地間、まなこはさらせ世の移り大東文化大学創立80年誌』『大東文化大学の歩んできた道』（90周年記念誌）などを編んで参りましたが、百周年を迎えるにあたり、これら先学による成果を十分踏まえた上で、より一層充実した百年史編纂に取り組んで参りたいと思っています。

百年史編纂事業には大学史そのものの編纂・刊行のみならず、大学史の研究とその成果の公開も含まれています。2016年度末に発刊いたしました『大東文化大学史研究紀要』（年1回刊行予定）はその1つの試みです。創刊号には研究ノート2篇と資料紹介2篇、そして2014年に本学が応募したスーパーグローバル大学創生支援事業申請に関する報告を1篇収録しました。研究ノートの内容のみ簡単に紹介させていただきますと、まず、宮瀧交二文学部教授による「大東文化学院草創期の日本史教育について」は、大東文化学院の草創期における日本史教育の実態を実証的に明らかにしたものです。学院において日本史がどのように教育されていたかを明らかにすることは、とくに当時の学院の自己認識にも深く関わる視点であり、その意味で本研究ノートは大学史研究に重要な貢献をなしているものと思われます。さらに2018年に設置認可が予定されている歴史文化学科での研究・教育にもその基礎を提供するものではないでしょうか。続く谷本宗生大東文化大学歴史資料館特任准教授による「関係資料からみる大東文化学院の歩み—大東文化学院物語」も、当時の学生がどのように学業に勤しみ生活を送っていたかが資料を通じて読み取ることができる興味深い内容のものです。2篇とも今後、研究論文に発展していくこ

とが大いに期待されます。是非、お読みくださり、ご批判・ご叱正を賜れば幸甚です。今後は年に数回の研究会を開催し、そこでの発表・議論を踏まえた学術論文も掲載して参りたいと考えています。

また同時により広く大東文化大学の歴史を知ってもらうために特設サイトを公開いたしました (<http://www.daito.ac.jp/100th/>)。すでに情報の発信手段としてのIT活用は当たり前になっていますが、今後ますますその重要性は増していくでしょう。サイトのメニューをご覧いただければおわかりかと思いますが、コンテンツとしては、歴史年表、大学に関する出来事や人物の紹介・解説、上述の紀要をはじめとする刊行物の紹介、新しく見いだされた資料の紹介、スポーツ大東、大東書道など本学の特色をなす活動の歴史、またおもに百年史編纂委員会メンバーで持ち回り担当するコラム記事などがあります。なるべくわかりやすく

するために画像なども種々取り入れながら、情報発信をして参ります。皆様には往時に思いを馳せつつ、大東文化大学の未来に夢を抱いていただきたいと心より願っています。その思いを込めつつ本サイトの統一コンセプトを「継往開来」という成句に込めさせていただきました。サイトのトップページに掲げられたこの四文字は、現・書道研究所所長の高木茂行（聖雨）先生に揮毫いただきました。この場を借りて御礼申し上げますとともに、この言葉に恥じないような百年史サイトにして参りたいと思います。

本年は、百年史編纂の具体的計画を本格的に実行に移していく年となるでしょう。現・元教職員の皆様はもとより、学生ご父母の皆様、同窓の皆様におかれましては、何とぞ百年史編纂にご協力、ご支援のほどよろしくお願い致します。

『大東文化大学史研究紀要』第2号 原稿募集

大東文化歴史資料館（大東アーカイブス）では、下記の規程に沿って原稿を募集いたします。今年度の投稿締切りは12月11日（月）を予定しております。投稿を希望される方は、氏名・ご所属のほか、原稿（論文その他）種別、予定タイトル及び文字数を10月末日までに下記のメールアドレスへお知らせください。積極的なご投稿をお待ちしております。

【投稿規程】

1. 大東文化大学史研究に資する研究成果を広く公募する。論文、研究ノート・資料紹介、エッセイは未刊行のものに限る。
2. 投稿資格は問わない。審査料・掲載料については、投稿種別を問わず無料とする。
3. 『大東文化大学史研究紀要』の編集は、百年史編纂委員会委員によって構成される『大東文化大学史研究紀要』編集委員会（以下、編集委員会）がおこなうものとし、編集委員会は各投稿論文等の審査（外部審査委員に審査を依頼する場合もある）をおこなう。編集委員会は審査の結果を受けて投稿の採否を決定する。なお、掲載に至る過程において執筆者に加筆修正を求める場合がある。
4. 『大東文化大学史研究紀要』に掲載される文章すべての著作権は、大東文化学園が保有する。
5. 論文等の形態について、次のような指針を定める。
 - (ア) 本文の使用言語は、原則として日本語および英語とする（原典部分はこの限りではない）。
 - (イ) 論文の長さは原則として、タイトル、末尾注、図表、数式および参考文献を含め、日本語の場合で

32,000字以内。英語の場合で8,000words以内とする。

- (ウ) 日本語・英語いずれの場合も、約250wordsの英語要旨を付けること。
 - (エ) その他、執筆要項については百年史編纂サイトを参照のこと。
6. 投稿は随時受け付けるが、当該年度発刊号のメ切りはその都度告知する。
 7. 原稿はWord等で作成すること。論文原稿には、投稿者の氏名、論文タイトル、総字数、住所、電話番号、E-mailアドレスを記載した表紙を付し、下記のアドレス宛に送付すること。なお、手書き原稿投稿を希望する場合には事前相談に応じる。
 8. 研究ノート・資料紹介については論文に準ずるものとする。字数は日本語で20,000字以内、英語で6,000 words 以内とする。
 9. エッセイについては、日本語で10,000字以内とする。
 10. 紀要に掲載された論文等は、大東文化大学機関リポジトリにおける公開を行うものとする。（併せて大学ホームページ上において目次情報の公開を行う。）掲載された原稿は、執筆者からの申し出がないかぎり、ウェブサイト上で公開されることを了承されたものとして扱う。

※他の規定については論文の規定に準ずるが、百年史編纂委員会の判断で手続きを簡略化できるものとする。

論文等の送付・投稿全般に関する問い合わせ先：

E-mail：archives@ic.daito.ac.jp

大東アーカイブス 第22回 企画展

大東文化学院・三部制の導入

～『漢学』の学校から文科系総合大学への胎動～

展示期間：平成29年5月18日(木)～平成30年3月30日(金)

(開室時間 毎週月～金曜日 9:00～17:00)

展示場所：大東文化歴史資料館 展示室(板橋校舎2号館1階)



第22回企画展「大東文化学院・三部制の導入 ～『漢学』の学校から文科系総合大学への胎動～」を開催いたします。

大東文化学院は、大正期末に「漢学振興運動」を背景に創設され、以降、漢学に特化した教育を行ってきました。しかし、創設から15年目に大きな転換期を迎えます。1938（昭和13）年、在学生を含む関係者からの要望や時局の要請により、大東文化学院は「漢学」専門学校から、3つの専門分野を持つ「三部制」へと組織変更を行いました。すなわち、「第一部 修身漢文科」「第二部 国語漢文科」「第三部 東亜政経科」から編成される私立専門学校となったのでした。

このうち、第一部の修身漢文科は1944（昭和19）年3月に皇学漢文科へとその名称を変更しました。これが、現在の文学部中国文学科の前身となっています。同様に、国語漢文科は文学部日本文学科、東亜政経科は現在の経済学部の源流となりました。

今回の企画展では、1938（昭和13）年の三部制の導入から、九段校舎から池袋校舎への移転を経て、1949（昭和24）年の新制大学「東京文政大学」設立までの、およそ10年間を辿ります。

◆三部制の導入と組織整備

昭和初期、大東文化学院では学費徴収や就職難により入学希望者の減少が顕著となっていたことから、教育課程や学科組織の見直しを迫られ、本科を3つに分ける「三部制」への変更を行いました。

「修身漢文科」では従来の伝統的漢学科目を中心に漢文教育が、「国語漢文科」では漢文のほか国語国文学科が正課として置かれました。以降、修身漢文科は漢文科中等教員の資格を、国語漢文科の卒業生は新たに国語科中等教員の資格を得ることができるようになりました。また、「東亜政経科」では「支那語及支那時文」の授業に多くの時間が割かれ、語学教育を中心としつつ、大陸事情や経済学系の科目が置かれました。同科の設置目的は「滿支両邦に活動して国策に寄与する国家的人材の要請」を目指すこととされ、昭和初期のまさに時代の要請に応じた開設でした。「漢学の大東」として知られていた本学は、大陸への関心を強く持つ青年たちを多く集めるようになっていました。

三部制導入後、卒業生の就職状況も改善傾向となりました。「漢文の大東」として中学校教員としての就職率も上昇、一方で語学力や大陸事情の知識を生かし、第三部卒業生を中心に大陸へわたり活躍する者も多く輩出することとなったのです。

この三部制への変更と同時に、大幅な定員増の申請も行われました。それまで年50名程度の入学者を受け入れていた大東文化学院は、各部定員50名とした150名を受け入れることとしたのでした。従来に比べ大幅な増員でしたが、入学志願者は予想をはるかに上回り、初年度からすでに定員の約5倍の希望者が殺到することとなりました。それを受け、特に人気の高かった東亜政経科の定員を翌年には80名に増やすこととなりました。

また、1940（昭和15）年からは鶴澤聡明が第九代総長に就任、飯島忠男を学務長、土屋久泰（竹雨）を庶務長として、刷新された学内組織での体制が始まりました。これを機に、従来の教授陣の多くが名誉教授となって第一線を退き、代わって飯島、土屋のほか藤塚鄰、加藤繁等が新たに教壇に立つこととなりました。なお、三部制には現在の「学部長」に相当する「部長」が置かれま

した。第一部長に飯島忠男、第二部長には平野彦次郎、第三部長には藤沢親雄が、それぞれ就任しました。

三部制となった大東文化学院は人気を博し、九段校舎には多くの生徒が溢れるようになりました。一方で、九段校舎は手狭なうえ、老朽化も進んでいました。校舎の移転は急務となり、教育環境の整備が必要となりました。試行錯誤の上、校舎の移転先は池袋に決まりました。1941（昭和16）年2月、池袋への移転が行われました。同年の「同窓会報」には、池袋校舎の移転についての記事が掲載されました。同誌によれば、このとき学生数は全学でおよそ810名、多くの学生を抱えて学内は活気にあふれていました。

◆三部制第一期生の卒業アルバム

1941（昭和16）年3月に卒業を迎えた、三部制「一期生」たちの卒業アルバムが残されています。

各科がそれぞれに制作したのですが、残念ながら修身漢文科のものは所蔵がなく、現物が確認できていません。第二部、第三部の卒業アルバムを見てみると、その構成はほぼ同様で、校舎写真から始まり、歴代教員や卒業生たちの写真が掲載され、恒例行事であった伊勢神宮や靖国神社参拝の様子なども収められています。また、2月に行われた新校舎への移転時期と卒業時期とが重なったため、池袋校舎建設の写真も収められています。

◆新制大学へ

大東文化学院は、戦後、新制大学となるために一時的に「東京文政大学」という名称へ変更、戦火で焼失した池袋校舎を再建し、図書館の整備を進めました。初代大学長には土屋久泰（竹雨）が就任、文政学部のみ単科大学としての再出発となりました。

この文政学部は、中国文学、日本文学、政治経済学の三専攻から編制されました。三部制をそのまま移行したものです。初年次の入学定員は各専攻40名の120名、戦前の三部制の折よりずっと少ないものでした。

(歴史資料館運営委員 浅沼薫奈)

＜資料寄贈ご協力をお願い＞

大東アーカイブスでは、三部制一期生が各科ごとに作成した卒業アルバムのうち、「第一部 修身漢文科」のものを探しています。ご協力をよろしくお願いいたします。

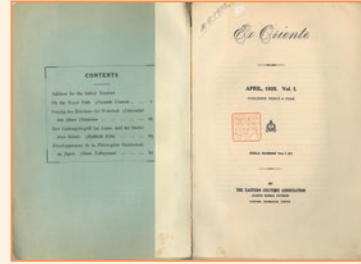
* 所蔵資料紹介 *

『EX ORIENTE』

『EX ORIENTE』 vol. I (エクス・オリエンテ創刊号) は、大東文化協会比較研究部より1925 (大正14) 年4月に創刊された雑誌です。北吟吉を編集主幹として、同協会や学院の研究活動を諸外国の学術機関へ紹介する海外活動誌の目的で発行された同誌には、英仏独の三ヶ国語での記載が見られます。刊行とともに海外各国へ送付され、ドイツやイギリスなど西欧諸国を中心に反響を得ました。当初は年3回の刊行を予定していましたが、第二・三号 (vol. II-III) の合併号が発行されたのは1926 (大正15) 年7月のことで、以降は続刊されませんでした。Vol. I (創刊号) は、次のような構成となっています。



創刊号表紙



vol. I 目次



vol. II - III 目次

- 創刊の辞 大木遠吉
- 王道の考察に就いて 鶴澤総明
- 独訳「証道歌」附註 大峽秀栄
- ロッチェに於ける妥当性概念とバーデン学派 北吟吉
- 本邦に於ける西洋哲学の発達史小島瞰岡 高山峻



復刻・復刊された EX ORIENTE

奥付以外に邦語は見られず、大木・鶴澤のものが英文、大峽・北が独文、高山が仏文となっています。

なお、本学創立60周年記念事業の一環として、1983 (昭和58) 年に復刻版の制作が行われ、同時に復刊も検討されました。1988 (昭和63) 年3月にはvol. IVが、続いてvol. V、vol. VIがそれぞれ1991年、1993年に本学東洋研究所より刊行されています。

(歴史資料館運営委員 浅沼薫奈)

【大東アーカイブス活動記録】 (2016年10月~2017年3月)

- | | |
|---|--|
| 10.3 企画展打ち合わせ | 1.13 百年史編纂ホームページ開設打ち合わせ |
| 10.28 百年史編纂WG | 1.20 総務課より資料移管 |
| 11.2 企画展入れ替え作業 | 早瀬紀子氏 (同窓生) より資料受贈 |
| 11.7 第21回企画展「大東文化歴史資料館 (大東アーカイブス)・大東文化大学ピアトリクス・ポター資料館 開館10周年共同開催 —大東文化大学ピアトリクス・ポター資料館と『ピーターラビット』の世界—」公開 | 1.26 全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会参加 (於: 東洋大学井上円了記念博物館) |
| 11.8 中林史朗氏 (中国文学科教授) より資料受贈 (~12.22書軸等受入作業) | 2.10 百年史編纂WG、百年史編纂ホームページ開設打ち合わせ |
| 11.30 ニュースレター「大東文化歴史資料館だより」vol.21発行 | 2.28 中央大学大学史資料課より資料受贈 (移管) |
| 12.1 全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会参加 (於: 印刷博物館) | 3.3 百年史編纂ホームページ開設打ち合わせ |
| 12.9 板橋展示室校舎模型台整備 | 3.8 第7回百年史編纂委員会会議
運営委員会会議 |
| 12.22 第6回百年史編纂委員会会議 | 池田剛士氏 (現代経済学科准教授) より資料受贈 |
| 内藤敬子氏 (同窓生) より資料受贈 | 宮瀧交二氏 (英米文学科教授) より資料受贈 |
| | 仲谷正樹氏 (元職員) より資料受贈 |
| | 3.30 百年史編纂ホームページ公開 |
| | 3.31 『大東文化大学史研究紀要』創刊号刊行 |

大東文化歴史資料館だより

第22号

DAITO ARCHIVES NEWSLETTER Vol.22

発行: 2017年5月31日

編集発行: 大東文化歴史資料館

〒175-0083 東京都板橋区徳丸 2-19-10

大東文化大学徳丸研究棟

TEL 03 (5399) 7646 / FAX 03 (5399) 7647

URL: <http://www.daito.ac.jp/information/about/archives/index.html>